

| | |
|---------------|---|
| Title | 藤原俊成の歴史意識 |
| Author(s) | 尾上, 新太郎 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 64 p.447-p.456 |
| Issue Date | 1984-03-20 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80993 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

藤原俊成の歴史意識

尾 上 新太郎

Shunzei Fujiwara's View of History

Shintaro OGAMI

Shunzei Fujiwara lived in a period of transition from Ancient Times to the Middle Ages.

That is the time when the Japanese had a distinctive view of history for the first time.

Shunzei was one of the first people who read the trend. But his view of history was a conservative one. He was a traditionalist.

It is Shinran (Buddhist monk) who, in the true sense of the word, developed a full-grown view of history. Shinran was born about sixty years later than Shunzei. Shinran's view of history correctly reflected the metaphysical sense of history.

For him, history meant the grace of Amitabha.

Shunzei is famous for being a pioneering critic of Japanese poetry in the Middle Ages.

The essence of criticism of Japanese poetry in the Middle Ages is that poetry and Buddhism are one and same. But, his view of poetry, like his view of history, was had to wait someone else to complete it.

1. 歴史意識と俊成

俊成の生きた12世紀から13世紀にかけては、古代貴族制社会から中世封建制社会への移行という日本史上の大変動期・大変革期であったわけだが、加藤周一は、その時期日本人に明確な形の歴史意識の萌芽があったとしている。即ち、その「親鸞—13世紀思想の一面—」(『日本文化研究』第8巻、新潮社)中、「一個の価値または原理の実現の過程としての歴史的発展という概念が、はっきりと自覚されはじめたのは、この時代からだと思ふ」と言っているのである。で、その証拠として俊成の『古来風体抄』を上げているのである。「過去が歴史なのではなく、現在を決定する過去が歴史なのである。すなわち動かし難くわれわれ自身を決定するものである。別の言葉でいえば、歴史は単なる過去ではなく、意味をもつ過去であり、その意味を、事実にあた

えるのが、われわれの歴史的意識であるということになろう」とも。周知の通り『古来風体抄』（初撰本）は、建久8年（1197年）の成立なのであり、『神皇正統紀』より百年以上も成立が遡る。又加藤は、「過去が偶然の継起ではなく、『発展』としてあらわれるためには、発展の主体として、歴史のなかで実現される原理、または価値がなければならない。その原理または価値に対する確信が、俊成にはあった」とする。しかし、『古来風体抄』の場合には、過去の事実は過去の歌でしかなかった。その歌という事実のなかに実現されてきた価値は、美的価値である」。

いずれ、俊成には、歴史意識というのが加藤の言う如く明確な形で出ているとまずされ、その事は、前代迄に比し特筆に価するであろう。以下、具体的に『古来風体抄』（初撰本）の文言に即し考察してみよう。

2. 俊成の歴史意識

やまとうたのおこり、そのきたれることとほいかな。ちはやぶるかみよゝりはじまりて、しきしまのくにのことわざとなりけるよりこのかた、そのこゝろおのづから六義にわたり、そのことは^{バンダイ}万代にくちず。かの古今集の序にいへるがごとく、人のこゝろをたねとしてよろづのことはとなりければ、春のはなをたづね秋のもみちをみても、うたといふものなからましかば、いろをもかをもしる人もなく、なにをかはもとのこゝろともすべ^{注1}き。

『古来風体抄』冒頭以下の文言だが、俊成が、歌というものがもしなかったとしたならば、「いろをもかをもしる人もな」としている点にまず着目してみよう。その理由とは言えば、「人のこゝろをたねとしてよろづのことはとな」ったのであればというものである。俊成は、過去に成立した歌に即してその成立の論理を言っているとされるから、その意味で彼の視点は、和歌の史的伝統の偉大さを問題にしているものとされる。冒頭「やまとうたのおこり、そのきたれることとほいかな」とある。で次いで、「ちはやぶるかみよゝりはじまりて、しきしまのくにのことわざとなりけるよりこのかた、そのこゝろおのづから六義にわたり、そのことは^{バンダイ}万代にくちず」とある。右文言に対し、田中裕は、「国家的乃至は民族的文学ともいふべき和歌がその長い歩みの後にすでに表現を完成して、後代の規範となるに至つてゐることを語る、といってよい」（『中世文学論研究』14頁、塙書房）としているが、そういう冒頭以下の発言に呼応さす形で、俊成は、「うたといふものなからましかば」と問題を出していつているのである。何処迄も俊成は、史的伝統を前提にして美を考えるのであり、和歌の史的世界を通す事で初めて我々は、ものの真実の美を知りうると説くのである。そこに過去が現在を決定するという歴史主義的態度を認める事が出来る。俊成は、文化伝統が培った美をこそ問題にするものである。俊成は単なる感性上の美など問題にしない。とは、対象に対して観念的という事だが、この際の観念性は深い意味をもつ。理念的に言えば、対象に対して最もリアルに触れていくものとして、対象を生むと迄言

えるものである。換言すれば、ものの真実の姿を開示する。その際それに相即する「人のこゝろ」は、事物の根源に根拠をおいているものとして、通常の人間の心という観点では、絶対的意味での無の性格を有するものとなる。とは、事実問題として言えば、我々人間はそういう心境に直接到達する事は出来ぬという事であり、そこにこそ史的伝統というものの存在の深い意味がある。即ち、それを媒介して転換を関するのである。歴史というのは、厳密には、そういうものとして恩寵的なものと言える。しかし、こういう徹底した意味での歴史というものに対する把握を俊成がもっていたと言うのではない。もしもって、そして実践したというのなら、彼の詠歌行為は、正しく全人的行為の問題となる。即ち、勝れて行為的であり、実践的歴史的建設的である。加藤は、俊成の歴史意識に対し、それは、過去の歌の歴史でしかなく、又そこに実現されて来たものは美的価値とされるものでしかなかったという底の事を言っていた。その美的価値の根源は、「人のこゝろ」であるが、もしその「人のこゝろ」が絶対的意味での無の意味のものなら、詠歌行為は、既述の如く、勝義に人間のあるべき、全身を賭けた行為の問題となる。しかし、その「人のこゝろ」が絶対的意味での無の意味において、俊成の場合把握されているとはしえない。又しかし加藤の見解より俊成の歴史意識は今少し深いものではなかったかともされる。要するに俊成は、歌というものがもしなかったとしたならばという下りで、日本の確固たる文化伝統と化している和歌の史的伝統というのを意味させたのであり、そして彼は、美というものはそういう和歌の史的伝統こそが培い育み織り成すものと考えていたのである。

俊成は、又もし歌というものがなかったとしたならば、「なにをかはもとのこゝろともすべき」としている。これは、難解な下りで、いくつかの説を見る。藤平春男は、「本来この『もとのこゝろ』の『本意』の和訓として用いられた語であろうと考えられるが、『本意』は平安末期以降の歌合判詞の中で一つの術語として用いられ、事物の美的本性とでも言うべき意味がある」（『新古今歌風の形成』140頁、明治書院）とする。さらには、「ただ、ここでの『もとのこゝろ』は、『本意』が一般的には所与的な一定の観念形態であるのとはちがって、主体的に働いて事物の美的本性を捉える心でもあることを忘れるべきではない」（同書同頁）とも。又藤平は、端的に、「もとのこゝろ」＝「人のこゝろ」とするものである。私も亦そう考える。俊成が、もし歌というものがなかったとしたならば云々と発想する時のその歌とは、事実上伝統としてのものである。和歌の史的世界の謂いとしてもよい。いずれ、そういう歌というものがなかったとしたならば、真実の美は知りえぬと彼はする。その理由は、和歌の史的世界というのが過去の「人のこゝろをたねとしてよろづのことはとな」ったものであるからである。とは、その「人のこゝろをたねとして」成立したところの「よろづのことは」の世界こそものの真実の美の世界を形成しているものという事で、又同様に伝統としての歌がなければならぬものという風に発想してみると、当然伝統としての歌の形成に与るところの「人のこゝろ」の謂いとなろう。で、歌がもしなかったとしたならば、「なにをかはもとのこゝろともすべき」と言う際の「もとのこゝろ」とは、規範としての心の謂いだが、他ならぬその「人のこゝろ」の事となろう。つまり、

「よろづのことは」に即して、歌の原理たる「もとのこゝろ」即ち「人のこゝろ」は見られるのである。「人のこゝろ」は、言葉たる歌を形成する事で自己を現実的なものとする。で、新たな歌を呼ぶのである。そこに歴史というものが成立する。逆に言えば、歴史というのは、原理を担っているものという事になる。和歌史に即せば、それは、歌の原理たる「人のこゝろ」を担っているものであり、「人のこゝろ」は、伝統形成の力でもあるものである。

参考迄に以下を附す、

入道中納家にまうてゝ古今つたへたまはりてかしこまり申けるついでに

いかさまにむすふ契もあらはれて
わかみにあまるよゝのことは

御 返 し

かきつめし^{注2}三代のことはつたへおく
もとのこゝろは色にみゆらむ

(『前権典厩集』^{注3}雑)

前権典厩（藤原長綱）の「わかみにあまるよゝのことは」のその「ことは」に即して、歌の原理たる「もとのこゝろ」が開示されるというのであろう。即ち、歴史上の歌の内に歌の原理を見ようとする態度と言える。で、又その「もとのこゝろ」とは、「人のこゝろ」の事とされよう。厳密に言えば、この「もとのこゝろ」の問題は、難問である。直接仏教的な意味に解するのが至当とされる歌の例もある。又「もとのこゝろ」を本来本意の和訓という形で理解してよいものか否か厳密に言うとは存疑ともされる。

さて、加藤周一は、歴史というものを価値や原理の実現課程としていた。俊成の場合価値は美的価値とされていた。原理という事では、「人のこゝろ」となる。しかしその「人のこゝろ」は、私の考えでは、俊成の場合徹底して深いものとはされない。この「人のこゝろ」がもし絶対的な意味での無の意味に解されうるものなら、そこでの歌は、精神的実践的行為の意味を全的に担うものとなる。因みに、東常縁・宗祇『古今和歌集両度聞書』では、「人のこゝろ」は、絶対的な意味での無の地平で把握されている。

人の心を種^{たね}とするといふは、天地開^{てんちひらけ}したちまちに^{きおこり}一^い氣起^げて葦芽のごとしと云る所なり。
天神^{てんしん}七代^{だい}已然^{いぜん}を云べし。一切^{さいばん}万物^{もつじ}の根元^{こんげん}也。爰^{こゝ}をさして人の心を種^{たね}とすといふなり。根元^{こんげん}の一念^{ねん}より出来^{いで}て、無始^{むし}より今日^{けふ}にいたる。終却^{しゅうこう}にをよぶべきなり。是人^{注4}の心なり。

又、同書卷末「真名序聞書抄」において、『古今集』真名序中の「託^{注5}其根於心地¹」に対して、

「其（の）根」とは、元來の無也。無は是さへて自性也。自性の源はあらはれず。

尤も、私の言う絶対的意味での無の意味とどう重なり、どう乖離するのか精考の要があり、ここでは、参考迄に触るのみという事にする。ところで、ここで歴史それ自身の考察を行なっておきたい。そもそも歴史とは何か、どういうものか、その存在の意味は、私はそこで親鸞の文言に着目する。後、言わば、返す刀で、俊成の歴史意識の次元を明確にしたいと考える。

3. 親鸞の仏教史観

親鸞にをきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてさふらふはこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身の信心にをきては、かくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと、云々。

注6
『歎異抄』

『歎異抄』第二条中の高名な下りだが、それに対する以前の私の理解はこうであった。私（親鸞）は、念仏を称えれば極楽往生出来るのか否か何も知らない。私は唯法然の言葉を信じて念仏を行なっているのみである。いずれ人間のはからは空しい。全ては無常である。しかし同じ無常なら私は意味のある方に賭ける。かかる事だから、信じないというのも私が正しいとするなら又正しいのである。どうするかは、全く個人の自由であり、個々人自らが決める事である。

このような私の浅薄な理解においても、過去の歴史は有り難いもののように思われた。歴史とは、全身を賭けて決断して生きて死んだ人々によって形成されて来たのであり、もし彼等の決断が無かったならば、歴史は、早く空しいものになっていただろう、そのように思われたのであった。しかしそう理解されるところにおける彼等の決断の原理はどういうものであったろうか。それは、単に人間の主観的なものに過ぎなかったのではないか。闇雲の決断、一種の狂気——それが歴史を形成して来たという意味ではなる。そこに一種の強烈な誠実さを認めることは出来る。しかし、全体として歴史は空しいものではないのか。偶然の決断が偶然歴史の形成を行ない

得て来た、——それだけの事に本質的に過ぎないのではないか。問題は決断の根拠が明確でない点にある。「信仰は単に個人の宗教的決断というよりも、自己の決断の自覚の底を突き抜けた、汝の決断によって成就する」。これは竹内義範「教行信証の哲学」(『現代仏教名著全集第6巻 日本の仏教(1)』、隆文館)中の言葉であるけれども、決断の根拠、原理の問題を明確に言い当てているものと考えられる。「汝」とは、親鸞にとって、師法然であり、法然は、親鸞にとって永遠の汝の相貌を帯びたものとして登場した。その法然にとつての永遠の汝とは、善導である。溯源するところ釈尊に行き着く。釈尊は、「超歴史と歴史の結合点」(西谷啓治「歴史について」、『随想集 風のころろ』中、新潮社)に位置する。即ち、釈尊において弥陀の本願は具体的となったのであり、歴史内のものとなったのである。その意味で、釈尊から歴史の意味の歴史が始まったと言える。勝義の歴史が釈尊から始まったと。そういう勝義の歴史の伝承こそが我々に正しい意味の決断の力を附与する。伝承は人間の記憶の問題という事では、言われる如く人間に記憶装置が備わっている事はまさに恩寵である。でその恩寵故に我々は滅罪の可能性を有するという事になろう。又我々が勝義の歴史の伝承の内に生きようとする時、信仰の命たるものはさらに自己を展開させていく事になる。この仏法伝承の問題を実は俊成も扱っている。天台流のものが、即ち、『古来風体抄』に、

さてかの止観にもまづ仏の法をつたへたまへる次第をあかして、のりのみちのつたはれることを人にしらしめたまへるものなり。大覚世尊のりを大迦葉につげたまへり。迦葉阿難につぐ。かくのごとくしだいにつたへて師子にいたるまで廿三人なり。この法をつぐる次第次第をきくに、たうとさもおこるやうに、うたもむかしよりつたはりて、撰集といふものもいできて、万葉集よりはじまりて、古今、後撰、拾遺などのうたのありさまにてふかくこゝろをうべきなり。たゞしかれば法文金口ふかき義なり。これは浮言綺語のたはぶれにはにたれども、ことのふかきむねもあらはれ、これをえんとしてほとけのみちにもかよはさむため、かつは煩惱すなはち菩提なるがゆへに、法華經には若説俗間經書略之資シヤウゴフトウカイジエンといひ、普賢觀にはなにものかこれつみ、なにものか是福、罪福無₂主₁。ワガコハロフノヅカラク我 心 自 空なりとゝきたまへり。

俊成には又以下の言説もある。

このみちのふかきこゝろ、なをことばのはやしをわけ、ふんでのうみをくむともかきのべんことはかたかるべければ、たゞかみ万葉しふよりはじめて、中古々々、後撰、拾遺、しも後拾遺よりこなたざまのうたのときよのうつりゆくにしたがひて、すがたもことばもあらたまりてゆくありさまを、代々の撰集にみえたるを、はしばししるし申べきなり。

俊成は、古来の風体の変遷を辿るその事で和歌の本質論としようとしている。ある原理的なも

のが歴史の内に開示されるという前提に立っているのである。先に引用した下りでは、まず仏法相承の歴史の話をし、返す刀で和歌史を通して和歌の本質論へ向おうとする視点を見せている。直接的には言っていないが、俊成は、又仏法相承の歴史がおのずから仏法の本質を開示すると考えてもいたのではなかったか。俊成が和歌の史的伝統を方法論的通路として、その原理・本質の解明を計ろうとするものである事については、既に触れた。俊成は、そういう意味で、伝統主義者であり、歴史主義者である。そしてそこには、親鸞のように過去の歴史が現在の行為を決定するという視点の存在を認める事が出来る。但し、俊成の場合、行為は全人的行為の意味をもっていない。彼における仏教と文学（歌）との関係の把握の問題を解明すれば、その事は、自然あかしされるだろう。

俊成の仏教文学論という観点で以下考察したい。

4. 俊成の仏教文学論

このみちにこゝろをいれん人はよろづよの春ちとせの秋のゝちはみなこのやまとうたのふかき義によりて、法文の無^ム尽^{ジン}なるをさと^リ、往生^{エン}ごくらくの縁^{エン}とむす^ビ、普賢^{フケン}の願^{ガン}海^{カイ}にいりて、この詠歌のこ^トばをかへして、ほとけをほめたてまつり、のりをきゝてあまねく十方^{ワウケイ}の仏土^{フツツ}に往^{ユウ}詣^キし、まずは娑婆^{シャバ}の衆^{シュ}生^{ジャウ}を引^{イン}導^{ダウ}せんとなり、(『古来風体抄』)。

歌は「ふかき義」をもつものだ。そういう歌を方法論的通路として後世人々を仏道に通はせるとする。しかし注意しなければならない。こういう発言は、現在唯今の詠歌行為それ自身は、無原則的に肯定されているところのものとするべきである。一体将来の贖罪を仮想前提にして現在の行為の罪性が払拭されるとしうのか。否であろう。現在唯今の行為の原理、客観性の問題としては、本質的に主我的という事になるものであろう。俊成は言っている、「煩惱^{ボンノウ}すなはち菩提^{ボダイ}」と。又『法華経』・『普賢観』の文章を引用する。しかし、この際それらは自己許容の言葉でしかない。今の今の自己は、無原則的に許されている。一体煩惱即菩提とは、菩提の観点で初めて言いうる事である。即ち、「即」の成立根拠は、菩提心の側にあるのである。換言すれば、此岸ならぬ彼岸にある。だから、人間の現実的には、煩惱即菩提とは、煩惱は迦悩、菩提は菩提の意とすべきものなのである。「『煩惱即菩提』、『生死即涅槃』ということは、転依によるさとり^{サトリ}の風光を表現するものとして、仏教一般の通則である」(長尾雅人「転換の論理」、『中観と唯識』中、岩波書店)とされるものだが、俊成は、実は、現実の罪な自己を考えるのに、都合よく視点の転換を弄しているのである。転換は、正しく言えば、転換させられてのものと言うべく、我的人間の主体性においては蓋し計いえぬものなのである。その転換に機能するものとして、視点を換えて言えば、勝義の歴史の伝承というものがあるのである。歴史時代に生きる我々としては、その伝承故に初めて転換を実践的に果しうる事になるものである。しかし、俊成は悔れない。彼には、狂言綺語の歴史的必然性、時代的要請の問題が考えられているのである。件んの『古来

風体抄』に、

上古のうたはわざとすがたをかざりことばをみがゝむとせざれども、世もあがり人のこゝろもすなほにして、たゞことばにまかせていひいだせれども、こゝろもふかくすがたもたかくきこゆるなるべし。

逆に言えば、末代においては、詞を磨き姿を飾る必要があるという事だろう。その事は、換言すれば、文体論を介在さす形での詠歌こそ俊成の時代においては必然的という事だ。この点にこそ、彼の古今和歌本体論定立の理由が存するとされる。北山正迪は、その「古今集和歌と知性」（『国語・国文』第36巻第9号、昭和42年9月）中、「俊成に於いては『人』であるといふことはそれ自身すでに『くだれる』ものであるといふ自覚があると考えられる」としている。で、又古今歌は、「始めて『人』といふものの自覚に立った『歌』」と。又俊成の時代「くだれる時よに於いて『人』といふものを露^{あらは}にみ、歌に於いてそれを越えうという思潮」がその趨勢であったと。「この集のころをひよりぞ、うたのよきあしきもことにえらびさだめられたれば、うたのほんたいには、たゞ古今集をあふぎ信^{シン}ずべき事なり」という俊成の『古来風体抄』中の発言は、まずもって自己の時代が下れる世という認識があつての事なのであり、そういう時代に生れ合わせたものとして真実の心の回復の問題を考えた際自然文体論を介在さす形で最初に成立した歌集であるところの『古今集』が浮び上って来たのである。古今歌が喪失した心の回復の方策を実際的につける、その意味で規範とされたのである。喪失した真実の心の回復の方法論に必然的に狂言綺語が入ったと考えられるのである。一体姿詞の問題が必然的に問われて来るようになったのは、時代が下ったからなのであり、話は人間が我執化したとしても同様である。逆に言えば、上古では、表現論とか文体論というものの必然性はなかった。さらに溯源すればどういう事になるか。『古今集』仮名序にかくある、

ちはやぶる神世には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、事の心わきがたかりけらし。ひとの世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまり、ひともしはよみける。

これに従うなら、神世には、短歌形式の歌は必要でなかったのである。なぜなら、人の心が素直であったから。我執の心が未だし判然とはなかったからである。それが判然化するところに又短歌形式の歌の出現があった。それは、すさのをのみことより始まるとされているが、その事は、彼が我欲の心の本格的な持主であった事を意味し、又その意味で人間らしい人間の始祖となる。彼を神というなら、彼は敢えて人となった神である。又敢えて言えば、仏教史観における釈迦の位置に彼はある。短歌形式の歌の出現はかく言う程に日本人にとって深い意味をもつものである。右『古今集』仮名序文言に該当する同真名序の下りは、

神代七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、逮₃于素戔烏尊、到₂出雲國₁、始有₁三十一字之詠₁、今反哥之作也。

で、『古今和歌集兩度聞書』卷末「真名序聞書抄」は、右に對し、

神代、自然に時すなをに、欲情^{よくせい}の心なかりしかば、歌と云（ふ）までにて、体^{たい}をわかち、心をかざりて、和歌をつくらぬ也、

とし、又

神代の歌は、只長短^{ちやうたん}をわかず、いかほどもつゞけ、ながながと云（ひ）もて行（き）、又一句・二句も歌とて待り。是、大道也。すさのおのみことより、はや心みじかく、世くだりて、ながき心をしらぬ故より、此（の）反歌^{（わ）}をこれり、

と。右に従うなら、人の世という下った時代になって、——とは、人の心が我執的になってという事だが、——短歌形式の歌の出現があったのだ。『古今集』仮名序に、「世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり」とある。該当する真名序の下り、「人之在世。不能₂無為₁。思慮易遷。哀樂相變。感生₂於志₁。詠形₂於言₁」。これらは、過剰な人間の心を言うのであり、それは、現実的に言えば、人間の我として位置付けを受けるものである。しかし、又その人間の我故、「事の心わ」くという事がある。事物の真実の開示は、その意味で、人間の我がなければならないものと考えられる。無論単なる我が事物の真実を開示するというのではない。そこには歌が入らなければならぬ。歌という作品が入らなければ、具体的に事物の真実の開示がないというのは、歌というものの存在理由を考える点で決定なところである。又無論「いろをもかをもしる人もな」とした俊成の件んの文言をこういうところに重ね合わせてよい。そして、そういう事物の真実の開示に相即する形で、人の心の真実が回復されるのでもある。かかるところでは、時代が下る事は、全く否定的な事とは少なくともしえぬとなろう。それは、生きて人の心の真実の機能する局面として、かえって、神世的なものが息附く事にもなるものである。

ところで、そう考えるなら、厳密に言えば、歌の原理たる「人のこゝろ」は、どうしても、下れる世においては、人間自身の力で内在化しえぬものとなる。そこにこそ、伝統的歌の存在理由が出るのである。しかし、俊成に、明確なこういう意味での伝統というものに対する把握があったかという点と既述の如く疑問視されるのである。第一彼は、詠歌行為の實際に即して罪性の払拭を説く事を成しえていない。将来の贖罪を構想して現在の自己を主観的に許容しようと彼はするものだった。彼の「人のこゝろ」の把握は、そういう意味で、今一つ深くないのである。有的である。又彼には、自己が歌人として立って然るべきか否かの問いがない。それは、運命論的問題であるけれども、そこを問わぬなら、詠歌行事が正しく行為の意味をもつか否かの問いもそもそ

も曖昧なものとなる。

「慈鎮和尚自歌合（十禪師跋）」の中で、俊成はこう言っている、

すべてこの道はいみじくいはむと思ひ、古きものをも見尽さむとするにも、更によらざるべし。且はたゞ前世のちぎりなるべし。すべて詩歌の道も、大聖文殊の知恵より起れることなれば、云々、

田中裕は評する（前掲書二七頁）、「表現はもはや単に己心の上にとりとめられるものではなく、それを超える一層高い層位での心と物との出合であり、むしろ何かある絶対者のはからひといふのがより適切であることがこれらの文言によって示されてゐるかと見えるのであるが、あくまで作者に即していへば本自無作といった境位における行為であるといっても差支ないかもしれない」。言われる絶対者のはからひの機能は、歴史時代、下れる世においては、人間の側からは全く予断の効かぬものである。人間は、そこでは絶対者に懺悔祈願する他はない。しかし、その懺悔祈願も、我意の人間には正しくは自己の方からは果しえぬものとすべきで、そこにこそ歴史の伝承の恩寵性という問題も出体するのである。この意味の歴史は、勝義のもので、宗教的決断の歴史、又歴史の意味の歴史といったものである。そういう意味の歴史との出会いを通して初めて人間は如何に生くべきかの方法とその生の力を開示され与えられる事になるのである。結果歌人として立つケースもあれば、又無論否定されるケースもある。又「本自無作」といった境位は、もはや言う迄もなく、下れる世においては、過去の勝義の歴史に出会う事で初めて具体的となるもので、その意味で、徹底して俊成は肯定的に歴史というものについて考えてみる必要があった。

注

注1 引用、風間書房、日本歌学大系第2巻による、『古来風体抄』に關係しては以下同じ。

注2 三はミの事だろう、御の意。

注3 引用、笠間書院、『藤原定家全歌集全句索引』（赤羽淑編）による。

注4 引用、右文書院、竹岡正夫『古今和歌集全評釈（上、下）』による、『聞書』關係の引用は全てこれによる。

注5 引用、岩波大系本による、以下『古今集』仮名序關係は全て同じ。

注6 引用、岩波文庫本による。

注7 注1に同じ。

※ 文献引用上適宜文字使い、訓点他勘案した点がある。